



平成22(2010)年7月26日(月)発行

発行者 小浜市多田2-2 中山クリニック 院長 中山茂樹

http://www.nakayama clinic.jp

学 習

予防接種あれこれ

(ワクチンに関するお話)

近年、高齢化するわが国では医療費の増加を抑制する必要から、疾病の早期発見に力が入られるようになりました。そこで、生活習慣病やガンの予防検診が国民ひとしなみに行われるようになりました。早く見つけてもっと悪くならない内に治療をという“ボヤの内に消す”思想です。

一方、世界先進各国はワクチンによって幼児の時から病気にかからない“ボヤを起こさない”思想が強いようです。わが国はワクチン後進国といわれています。また、長らく麻疹(はしか)の輸出国とやゆされてきました。大学生など成人の麻疹の流行もあり、MRワクチン(麻疹、風疹用)も2回接種となりました。が、接種率が悪いようです。

わが国ではワクチンに対して国民が副作用に過敏なこともあるのですが、新しいワクチン導入にはかなり時間がかかってしまいます。そんな中、すでに先進国では定期接種に組み入れられているものですが、最近、ようやく日本でも新しく、次のような予防ワクチンが接種できるようになりました。

- ・ **H i b ワクチン**…インフルエンザ菌で、乳幼児には重症な感染となる髄膜炎・菌血症の原因となる疾病の予防。生後3ヶ月から5歳までの接種です。
- ・ **肺炎球菌ワクチン**…これもインフルエンザ菌と同様、乳幼児には重症感染となる疾病からの予防。3ヶ月から9歳までの接種です。
- ・ **子宮頸ガンワクチン**…子宮頸ガンの発症を予防。10歳以上の女性に接種します。

これらも、わが国では任意接種の扱いで、費用は自己負担という状態です。(一部の自治体では費用の一部補助の動きは見られます。)

子育て世代には大きな負担ともなり、お金のばらまきとも評されている子育て支援のあり方を問うことでもあります。これらは、ワクチン後進国の悪名返上のためにも是非、公費負担が望ましいことだと思われま

す。これら、いろいろな疾病からの予防のためのワクチ

ン接種はわが国の「予防接種法」によるのですが、その法は昭和23年6月に制定されたもので、戦後の悪い衛生状態の改善をしながら感染症を克服してゆくために占領軍の指導の下に急ぎ制定されたものでした。それでもその頃のワクチンの効果はたいしたもの、日本は多くの疾病から救われたのでした。その後、たびたび改訂されていますが、現在、わが国の定期接種は次のワクチンが指定されています。

- 1, 三種混合、DPT (ジフテリア・百日咳・破傷風)
- 2, ポリオ 3, BCG 4, MR (麻疹・風疹)
- 5, 日本脳炎

さて、現在のわが国の平均寿命は世界に冠たる女86、男79歳になっていますが、これはこの「予防接種法」等による乳幼児の死亡率の低減によるところが大であるからで、抗生物質使用以上の効果だと見る医療関係者が多いのです。(勿論、過酷な労働からの解放、十分な栄養摂取、教育の普及、快適で清潔な住居などもあります。乳幼児の死亡率の低減などの医療の充実が大きいのです。)

抗生物質に頼った医療は耐性菌を生み出しており、こうした菌に対抗するのはワクチンが最大の武器なのです。また、麻疹やB型肝炎に代表されるウイルス感染症には効果的薬剤はワクチン以外に存在しない現状と断言していいでしょう。

そのように見ると、世界で開発されるワクチンをいかに正しく、効果的に、定期接種として取り入れていくか、ということがわが国の今後のワクチンに対するビジョンということになります。これら定期接種のワクチンについてはアメリカと比較するとわが国の種類は随分少なく、さらにアメリカやイギリスは予防接種の多くは法律によって無料ですが、日本は多くが個人負担になっています。

冒頭ではわが国は高齢化の中で早くに病気の予防検診に力をいれていることを書きましたが、片や、乳幼児からの予防、ワクチンの接種という考えも大切であり、それらの多くを公費負担ですることがかえって、国全体の医療費の軽減につながるのだ、ということを強調したいものです。(資料提供 真里子Dr)

〈あとがき〉

当院待合室、ミニギャラリーでは先月までの山崎久子さんの油絵に代わって小林裕子(ひろこ)さん(実家=小浜市甲ヶ崎 現在=アメリカ・サンディエゴ在住)の水彩画です。京都芸術短大卒業後、アメリカ人の夫と共に2001年渡米、2006年長女が生まれて以来、長女の記録を絵に留めたくて描き始めた。長女の2歳くらいまでを描いた5点を展示しています。ご鑑賞下さい。